

文化生活・教育常任委員会 管内調査

令和6年1月17日（水）

1 京都府立清明高等学校（京都市北区）

【調査事項】

「学びアンダンテ」をコンセプトとした京都府立清明高等学校の取組について

【調査目的】

京都府立清明高等学校が「京都フレックス学園構想」に基づき、不登校経験者や自分のペースで学びたい生徒などが生活スタイルに合わせて授業を受けることができる昼間2部制の単位制普通科として開校し、まもなく10年が経過することから、「学びアンダンテ」をコンセプトとした京都府立清明高等学校の取組について調査する。

【調査内容】

京都府立清明高等学校は、長期欠席経験者の生徒も多数入学しており、高校での欠席日数が30日に達するなど、思うように登校できていない生徒もいる。一方で、4分の3の生徒が欠席日数10日以下であるなど、多くの生徒が順調に学校生活を送っており、①自分のペースに合わせて選べるフレキシブルな教育システム、②個別アプローチとしての合理的配慮（入学者選抜特例措置や通級指導など）、③オールマイノリティの風土（多くの中学校から少数派が集合しており、標準に合わせるという圧力や周囲に対する劣等感を感じる事が少ない）の大きく3つが心理的安全性を高めている。

学ぶ楽しさを提供するため、定期テストや宿題等を廃止し、ふだんの授業における取組状況や振り返りシートを総合した多面的な評価を行うほか、学習スタイル別のフレックススタディの実施や一斉授業の縮減の試行、生徒個人の「ヲタ活」や「推し活」を学校として奨励し、互いに交流するチャレンジデーなどの取組を行っている。

また、これまでの学校教育が生徒の自信を奪ってきたという前提に立ち、自信を与えることよりもこれ以上自信を奪わないことを優先するため、全員参加の研修旅行や体育祭を廃止し、希望参加によるサマーキャンプや新しいスポーツ行事「つばめ杯」を行うなど、生徒にとって小さな成功体験ができるような取組を行っている。

教職員に向けては、ティーチャーズバイブルを作成するとともに、生徒に学ぶ教職員研修として、書字障害や感覚過敏などの当事者である生徒から話を聴講するほか、自分のペースで学べる授業を実現するため、授業での困りごとについて生徒と対話し、よりよい授業の在り方を模索するなど、様々に取り組んでいるとのことであった。

【主な質問事項】

- ・清明高校のスタイルを他の学校に広げることについて
- ・授業の個別最適化のメリット及びデメリットについて
- ・個別に配慮が必要な生徒への対応について
- ・入学希望者の増加について

など



調査事項を聴取



校舎内を視察

2 京都府立植物園（京都市左京区）

【調査事項】

100周年を迎える京都府立植物園の取組について

【調査目的】

令和6年1月1日に開園100周年を迎えた京都府立植物園は、日本最古の公立植物園である。京都府立植物園の次の100年に向けた今後のさらなる取組について調査する。

【調査内容】

京都府立植物園は、大正13（1924）年に日本で最初の公立植物園として開園以来、植物を保存・栽培・展示し、広く府民の憩いの場とするとともに、植物の鑑賞を通じて教育・学習・植物学の研究に寄与するための施設「生きた植物の博物館」を理念として、公開・運営している。多様な園芸品種を栽培するとともに、高度な栽培技術の継承や絶滅危惧種の栽培保全、日本最大級の温室では約4,500種類を展示し、国内初開花の植物も多数そろえるほか、各種展示会・講演会等を通じた園芸文化の普及に取り組んでいる。

開園100周年を契機に、連携協定を締結しているシンガポール植物園からランを譲り受け、現地職員から栽培・展示ノウハウを教わり、より魅力的なラン室の展示リニューアルを実施し、令和6年1月6日から公開した。

次の100年に向けて、誰もが楽しく学べる「学びの入口」としての学習機能強化と京都府内の植生把握等を通じた植物多様性保全への寄与をコンセプトに、京都にはまだない京都植物誌の発行に向けた取組や学習拠点・標本庫の整備に向けた取組を進めるとともに、博物館機能の強化と子どもたちが楽しく学べる場づくりを進めているとのことであった。

【主な質問事項】

- ・ボランティアガイドの体制について
 - ・次の100年に向けた取組について
 - ・バックヤードの今後の方向性について
- など



調査事項を聴取



開園100年の歩み展を視察



温室を視察